



2009年3月4日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

心身医学領域と漢方医学

九州大学大学院 医学研究院 心身医学 准教授 岡 孝和

#### (4) ストレスによって生じる病態 気鬱、気逆

前回は、気の病態の1つである気虚について説明しました。漢方では、気の病態を気虚、気鬱、気逆の3つに分類しています。気虚はホメオスターシスを維持し、ストレスに適應するための気が量的に不足した状態をさすのに対して、気鬱と気逆は気の機能、運行の失調状態をさします。つまり、気虚と気鬱、気逆は異なる尺度による分類であるため、気虚と気鬱、気逆は併存する場合があります。

(気鬱とは)

気鬱とは、気の働きが生体の一部で滞った状態をさします。心理社会的ストレスは容易に気鬱の状態を引き起こすため、中医学では、心理社会的ストレスによって生じる気鬱を肝気鬱結と、特別な用語で呼んでいます。気鬱でみられる精神症状としては、いらいら感や抑うつ気分、身体症状としては膨満感、つかえ感、腹痛といった症状があります。気鬱は、しばしば瘀血、水滯、気虚、気逆といった病態と併存します。

### (気鬱の症状、臨床像)

心理社会的ストレスによって生じる気うつ、つまり肝気鬱結の症状は、ストレス性に生じる精神症状と、(1) 交感神経・副腎髄質系、(2) 迷走神経系、(3) 骨格筋の緊張状態による症状と考えられます。どの身体部位のどの系の機能亢進が主に現れているかにより、臨床症状と適応となる漢方製剤が決まってきます。

#### 気鬱の治療

気うつを改善する生薬には柴胡、芍薬、半夏、厚朴、蘇葉、香附子、薄荷がありますが、心理的ストレスにより増悪する気うつに対しては、柴胡を含む漢方薬がよく用いられます。

脳の精神活動が滞り、抑うつ状態を呈している場合は香蘇散や加味帰脾湯が適応です。

身体各部では、のぼせ感を伴う頭痛に対しては女神散、咽喉頭の違和感に対しては半夏厚朴湯や柴朴湯が適応です。香蘇散と半夏厚朴湯に含まれる蘇葉、その一成分であるローズマリン酸には抗うつ作用が存在することが知られています。

季肋部の滞りに対しては柴朴湯の適応です。季肋部の気うつは、気管支喘息患者の呼吸機能に一致しない呼吸困難感や肝彎曲部、脾彎曲部の腹部膨満感という形で現れます。

腹部膨満感、腹痛に対しては桂枝加芍薬湯などの芍薬を含む漢方製剤の適応です。

交感神経を介する症状としては、手足の多汗症に対しては四逆散、発汗、ホットフラッシュなどの血管運動性症状に対しては加味逍遙散、筋肉の緊張亢進、チックなどの不随意運動に対しては抑肝散の適応です。

いらいらによって身体症状が増悪する時には柴胡剤が有効です。イライラして蕁麻疹ができる、アトピー性皮膚炎がかゆくなるという場合、抑肝散が有効です。動物実験では抑肝散はストレスによるアレルギー反応の増悪を抑制することが示されています。抑肝散は、イライラで増強する疼痛にも有効な場合があります。またイライラで増悪する慢性前立腺炎の疼痛に対しては竜胆瀉肝湯が有効です。

次に気鬱を呈する代表的な疾患である、過敏性腸症候群、機能的腹痛症について述べます。機能的腹痛に対しては、芍薬と甘草の組み合わせの漢方製剤がよく用いられます。芍薬には鎮静作用と鎮痙作用の両方が存在します。

桂枝加芍薬湯は下痢、便秘、腹痛、腹部膨満感などの下部消化管に由来する症状には効果が高いものの、上部消化管、消化管外愁訴に対しては必ずしも効果は強くないため、芍薬、甘草をベースにしながらも、患者の状態にあわせて、漢方薬を検討してみる必要があります。

次に仮面うつ病についてです：身体症状を全面としたうつ病を仮面うつ病と言いますが、仮面うつ病でみられる身体症状は気鬱の症状が少なくありません。柴胡加竜骨牡蛎湯、四逆散、加味帰脾湯などの柴胡剤がしばしば適応となります。

### (気逆の臨床像)

次に気逆について述べます。

気逆は、下に向かう気の働きが障害され、上に向かうようになった状態を指します。気

逆には2つのタイプが存在します。一つ目は発作性に不安感、動悸、嘔気などが生じるタイプです。しばしば気虚を併存しています。二つ目は、のぼせ様症状とイライラを訴えるタイプで、気うつを伴いますが、気虚は明確でないことがほとんどです。

気逆は過覚醒と交感神経・副腎髄質系の過剰亢進状態と考えられます。生体の寒熱の状態が、中間から寒の状態であれば、交感神経機能の亢進により末梢血管が収縮して手足の冷えても、のぼせ感は生じませんが、タイプ2の患者のように、もともと熱の状態であれば、ストレスによって末梢血管が収縮すると、さらにのぼせて赤ら顔が顕著になります。

(治療)

したがって、タイプ1のように発作性に不安感が生じる気逆の状態に対しては桂皮を含む苓桂朮甘湯、抗不安作用のある竜骨、牡蛎を含む柴胡加竜骨牡蛎湯や桂枝加竜骨牡蛎湯で治療しますが、タイプ2のようにイライラし、のぼせる患者に対しては、清熱作用、つまり熱をさます作用のある黄連を含む黄連解毒湯、桃核承気湯、桂枝茯苓丸で治療します。

次に気逆を呈することの多い疾患に対する漢方治療について説明します。

まず不安障害についてです。

タイプ1の気逆はパニック障害や外傷後ストレス障害患者で多く見られます。パニック障害に対する漢方薬の有用性を多数例で検討した報告は見られませんが、柴胡加竜骨牡蛎湯の他に、手足の冷えが存在する場合、柴胡桂枝乾姜湯が有効なことがあります。私の経験ではSSRIがなかなか離脱できない時、柴胡加竜骨牡蛎湯を併用すると離脱が容易になる症例があります。

次に高血圧患者の身体愁訴について

タイプ2の気逆は、高血圧患者や更年期婦人によく見られます。黄連解毒湯を高血圧患者に投与しプラセボと比較したところ、黄連解毒湯は血圧に影響を及ぼさなかったものの、高血圧患者ののぼせ、顔面紅潮、興奮、精神不安、睡眠障害を改善したという報告があります<sup>1)</sup>。

最後に気鬱、気逆に対する心身医学的注意点について触れておきます。

気鬱、気逆と気虚が併存する場合、気鬱にのみ気を奪われ、補気を行わず理気だけを行うと、気虚の症状が悪化することがあります。逆に気虚を改善することで気鬱の症状がよくなることがありますので、気鬱、気逆の治療においては気虚の治療との兼ね合いが大切です。

次に、漢方では気鬱の治療を考えるときに、生体のどこに滞っているのかを重視しますが、気鬱は人間関係や、患者の不適切な認知、行動パターンによって生じていることも多く、後者の要因が大きく関与する気滞に対しては、薬物療法だけでなく環境調整や認知行動療法を併用することが大切です。

最後に、心理社会的ストレスによって生じる気鬱を肝気鬱結とよぶと言いましたが、肝気はのびやかを好みます。患者が診察室を出るときに安心した表情になっていれば、気鬱に対する漢方療法は、より有効になると考えられます。